

看護研究 第45巻 総目次

2012年(第1号～第7号)

〔表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ〕

〔特集〕

第1号◆研究者育成のための質保証における グローバルスタンダード

(企画：牧本清子)

- 研究者育成の質保証の現状と課題、牧本清子、(1) 6-14.
研究者育成の質保証に向けた日米の大学院教育の相違 —
大阪大学大学院保健学専攻における取り組み、牧本清
子、(1) 15-22.
米国における研究者育成の質保証の現状と課題 — ワシ
ントン大学を中心に考える、近藤暁子、(1) 23-31.
英国の大学におけるリサーチスチューデント育成のための
サポートシステム — マンチェスター大学を例に、小松
容子、(1) 32-38.
フィンランドにおける看護研究者育成の現状と課題、佐々
木明子、(1) 39-46.
タイにおける看護研究者育成の質保証の現状と課題、山本
あい子、岩國亜紀子、(1) 47-52.
JCEBPの活動からわが国の研究と研究者育成の質保証を
考える、伊藤美樹子、山川みやえ、心光世津子、竹内佐
智恵、(1) 53-61.

第2号◆研究の普及を支える基盤としての 論文執筆

(企画：前田樹海)

- 研究の普及を支える基盤、前田樹海、(2) 103-112.
看護系論文の執筆スタイルの現状と展望 — 看護研究の普
及を支えるために研究者と研究指導者、看護系学会がで
きる、谷津裕子、中木高夫、(2) 113-137.
論文執筆マニュアルを研究にいかすために — 主要な3つ
のマニュアルの比較からみえてくるもの、江藤裕之、(2)
138-150.

第3号◆質的研究を学び合う

JRC-NQRの実践

(企画：谷津裕子)

- 質的研究の学び舎 JRC-NQR、谷津裕子、(3) 213-220.

- 看護学の知の母胎としての「語らいの場」、中木高夫、(3)
221-226.
『看護研究』誌にみる日本の質的研究の変遷 — 過去約40
年間におけるレビュー、住谷ゆかり、(3) 227-231.
質的研究におけるインタビューの捉えと実践、深谷基裕、
(3) 232-237.
エスノグラフィー — 理論的パースペクティブの変遷と看
護研究における可能性、阿部利恵、(3) 238-242.
言説分析について、永田明、(3) 243-247.
研究論文の投稿から掲載まで — 特に査読後の心境の変化
に焦点を当てて、千葉邦子、(3) 248-252.
システマティックレビューにおけるエビデンス統合とその
解釈的アプローチ、北素子、(3) 253-259.
社会構成主義の実践としての対話 — Gergen の『あなたへ
の社会構成主義』から、濱田真由美、(3) 260-265.
質的研究の統合 — メタ・シンセシスに焦点を当てて、谷
津裕子、濱田真由美、(3) 266-274.
言語学と質的看護研究 — JRC-NQR と私、江藤裕之、(3)
275-279.

第4号(増刊号)◆経験を記述する

現象学と質的研究

(企画：西村ユミ)

- 経験の編成を記述する、前田泰樹、(4) 311-323.
経験を記述するための言語と論理 — 身体論からみた質的
研究、村川治彦、(4) 324-336.
経験を理解するという探究の経験を通しての記述、大久保
功子、(4) 337-345.
緩和ケア病棟における看取り — 死の直後の実践経験、守
田美奈子、(4) 346-355.
看護学生の「患者理解」という経験に関する記述 — ガダ
マーの解釈学を手がかりに、前川幸子、(4) 356-367.
うつ病という病いの経験を語ること／記述すること、近田
真美子、(4) 368-376.
HIV 感染した血友病患者の経験 — 経験の捉えなおしに焦
点を当てて、大村佳代子、(4) 377-387.
時間経験と協働実践の編成 — 急性期病棟の看護に注目し
て、西村ユミ、前田泰樹、(4) 388-399.
事象に示される通りに — フィールドワークという実践、
西村ユミ、前田泰樹、(4) 400-408.

第5号◆北欧ケアとは何か

看護研究への示唆

(企画：浜渦辰二)

北欧ケア研究のために—もう1つの現象学的アプローチ。浜渦辰二。(5) 428-438.

患者に焦点を当てることは生活世界に焦点を当てることである—ケア学というパースペクティブ。カーリン・ダールベリ／監訳：浜渦辰二，翻訳：川崎唯史。(5) 439-449.

北欧ケアの思想的な拠り所—問いとしての「福祉」。竹之内裕文。(5) 450-465.

ホスピス・緩和ケアにおける生活世界ケア—スウェーデンとスコットランドのホスピス・緩和ケア病棟の視察を通して考えたこと。齊藤美恵。(5) 466-474.

第6号◆ケアリングが築く未来

国際ケアリング学会の成果

(企画：国際ケアリング学会企画委員会)

【名誉会長講演】私たちのヒューマニティの心に触れる—平和へのカリタスの道 Touching the Heart of our Humanity: The Caritas Path of Peace. Jean Watson／監訳：稲岡文昭，編集：筒井真優美，江本リナ。(6) 528-537.

【教育講演】ナラティブを通してケアリングの心を開く—1人の語り手は世界を形成する(ホピ族の言葉) Opening the He[art] of Caring through Narrative: One who is a Storyteller is One who Shapes the World—Hopi Saying. Christopher Johns／監訳：田村由美，編集：筒井真優美，江本リナ。(6) 538-546.

【教育講演】ナイチンゲールの遺産—ケアリングと平和に向けた統合看護・ホリスティック看護のサイエンスとアート Florence Nightingale's Legacy: The Science and Art of Integral and Holistic Nursing for Caring and Peace. Barbara Dossey／監訳：戸村道子，編集：筒井真優美，江本リナ。(6) 547-557.

【会長講演】看護マネジメントにおけるケアリング Caring in Nursing Management. 新道幸恵。(6) 558-564.

【教育講演】看護教育におけるケアリングと平和 Caring and Peace on Nursing Education. 安酸史子。(6) 565-572.

第7号◆臨床看護師が取り組む

研究モデルの探究

(企画：坂下玲子)

本特集の構成について。坂下玲子。(7) 628-629.

臨床看護研究に関する文献検討。宇多絵里香。(7) 630-

637.

臨床看護師が取り組む看護研究の実態。坂下玲子，西平倫子，西谷美保。(7) 638-642.

なぜ，病院は看護研究に取り組むのか。宮芝智子。(7) 643-648.

臨床から発表される論文の検討。北島洋子。(7) 649-658.
米国における臨床看護研究の現状—スタッフナースへの研究活動支援プログラムに着目して。岡田彩子。(7) 659-665.

Evidence-Based Patient Management, Micro-Evidence, and Micro-Trialing. Ivo Abraham, Karen MacDonald.(7) 666-672.

【翻訳】エビデンスに基づく患者マネジメント，マイクロエビデンスとマイクロトライアリング。Ivo Abraham, Karen MacDonald／翻訳：坂下玲子。(7) 673-678.

研究モデルの提案。坂下玲子。(7) 679-685.

意義ある臨床看護研究のあり方—まとめにかえて。坂下玲子，内布敦子，片田範子。(7) 686-690.

〔原著論文〕

前腕の皮膚水分喪失量(TEWL)簡易計測パッチによる全身発汗量の推定。四十竹美千代，堀悦郎，八塚美樹，小野寺孝一，浜出絵理子，横井秀輔，小野武年，西条寿夫。(1) 80-86.

小児病棟の組織文化と看護実践—患者が子どもであることによる困難さ。川名るり。(5) 492-504.

〔研究報告〕

認知症高齢者の家族介護者に対するソフトマッサージ(タクトイールケア)のストレス・介護負担の緩和，健康の回復に関する有効性の検討。鈴木みずえ，三浦真澄，鈴木初枝，木本明恵，江向洋子，林辰弥。(6) 589-602.

〔特別記事〕

【国際看護研究の魅力—タンザニアにおけるフィールドワークと米国大学院での経験③】これから国際看護研究を行なう研究者のために—教員・アドバイザーによる「覚書」。Crystal Patil・Kathleen Norr／翻訳・執筆：新福洋子。(1) 72-79.

看護教育と看護実践において，臨床的な知識を発展させるには—パトリシア・ベナー博士来日講演会(京都)より。Patricia Benner／通訳：早野 ZITO 真佐子。(2) 153-166.

Margaret Newmanによるニューマン・ブラクシス方法論—実践的研究例：がん体験者と家族による「生活習慣立て直し対話の会」支援モデル開発。遠藤恵美子，高

木真理. (2) 168-186.
 質的研究の結果は一般化できないのか? — 質的研究における一般化可能性. 谷津裕子, 北素子. (4) 414-420.
 日本の医療分野における質的研究論文の検討(第1報) — 論文数の推移と研究法の混同. 戈木クレイグヒル滋子, 三戸由恵, 関美佐. (5) 481-489.
 日本の医療分野における質的研究論文の検討(第2報) — 研究法の選択とデータ収集. 戈木クレイグヒル滋子, 三戸由恵, 関美佐. (6) 578-586.
 日本の医療分野における質的研究の検討(第3報) — データ分析. 戈木クレイグヒル滋子, 三戸由恵, 関美佐. (7) 694-703.

〔提言〕

Mixed Methods を用いた看護研究の提案. 古川亮子. (2) 188-192.

〔連載〕

Words, words, words. — 学際的な ダイアローグをめざして

- ①学際的 — interdisciplinary. 江藤裕之. (1) 66-70.
- ②普遍と個 — universal vs. individual. 江藤裕之. (2) 194-199.
- ③サイエンスとアート(その1) — science vs. art(part 1). 江藤裕之. (3) 298-303.

- ④サイエンスとアート(その2) — science vs. art(part 2). 江藤裕之. (5) 506-511.
- ⑤記述と規範 — descriptive vs. prescriptive. 江藤裕之. (6) 604-609.
- ⑥「目に見えないもの」を見る. 江藤裕之. (7) 706-711.

看護研究の基礎 意義ある研究のためのヒント

- ⑦アンケート(質問票)の設計 — Developing a Questionnaire. 坂下玲子. (1) 88-96.
- ⑧インタビューデータの収集 — A Guide to Interview. 坂下玲子. (2) 200-206.
- ⑨量的研究 — 分析の基礎(前編) — Quantitative Data Analysis(the first part). 坂下玲子. (3) 286-296.
- ⑩量的研究 — 分析の基礎(後編) — Quantitative Data Analysis(the second part). 坂下玲子. (5) 512-521.
- ⑪質的研究 — 分析の基礎: 方法崇拝に陥らないために — Qualitative Data Analysis: Preventing Methodolatry. 田中美恵子, 坂下玲子. (6) 610-619.
- ⑫Mixed Methods 研究. 坂下玲子. (7) 712-720.

〔書評〕

『ベナー ナースを育てる』日本にもいさせる看護教育変革の提案. 田中美恵子. (2) 167.
 『看護研究のための文献レビュー — マトリックス方式』文献レビュー「マトリックス」空間で創造的な論文を作成. 石原逸子. (5) 475.